不器用な生き方を責められることはない

内閣府の調査[*1]によると、日本国内でひきこもり状態にある人は約146万人と推計されています。その要因は、新型コロナウイルス感染症の流行や病気をはじめ、対人関係、退職、不登校など多岐にわたります。今回、自身の中学時代から６年に渡りひきこもりを経験された山田ルイ53世さんにお話を伺いました。

（インタビュアー：町 亞聖（まち あせい）：日本テレビアナウンサー、同報道局記者、キャスターを経て、フリーに。医療と介護を生涯のテーマに取材、啓発活動を続けている。）

町　『ヒキコモリ漂流記』[*2]読ませていただきました。小学生時代の山田君は児童会長にも選ばれ、とても優秀な少年だったんですね。

山田　成績も良く、サッカー部に入った日にリフティングを１００回できたりと、何でもできる幼少期でした。周囲に一目置かれていましたが、何より、自分自身、「俺ってちょっと神童感あるな…」と思っているようなイヤな子どもでしたね。

町　中学受験もされたと。

山田　まさに中学受験を突破した時に生まれたのが神童感で、当時、兵庫県の田舎町で中学受験する子どもはわずかで、受験勉強するクラスメイトがとても格好良く見えたんです。大人に褒められることがモチベーションだった僕は、親に「ずっと中学受験がしたいと思っていた」と考えてもいなかったお願いをしたんです。

町　小学生にしては、したたかで計算高かったんですね。

山田　嘘のストーリーを仕立てあげたところ、親はあっさり受験を許してくれた。それまで塾も行っておらず、受かるとはと思っていなかったのかもしれませんが。

町　見事名門中学に合格します。

山田　一応、塾には通わせても

山田ルイ53世 さん
1999（平成11）年に、ワイングラス片手に「ルネッサーンス！」でのおなじみのお笑いコンビ・髭男爵を相方のひぐち君と結成。『第１回 一発屋オールスターズ選抜総選挙 2015』初代王者。著書に『ヒキコモリ漂流記 完全版』、『パパが貴族』、『一発屋芸人の不本意な日常』、『一発屋芸人列伝』（編集者が選ぶ雑誌ジャーナリズム賞・作品賞）など。

らいましたが、そこは先生とその甥っ子と自分だけという、とても受験を勝ち抜けるような体制ではありませんでした。初めは先生に教えてもらっていましたが、レベルが上がると先生が問題を解けなくなってきた…。でも僕は、先生に恥をかかせてはいけないと、答えのヒントをさり気なく伝えて先生を正解に導くみたいな…。その塾で中学受験に成功したのは自分が初めてで、「君も山田君になれる」というビラを先生が町中にばらまいたんです。そんな風に言われたら「自分はすごいんだ」となりますよね。この出来事が僕の神童感を増幅させた。でも実は、半年間、深夜1、2時まで起きて身体を壊すぐらい勉強していたんです。

町　人知れず努力していたんですね。中学の成績はどうでしたか。

山田　中学の成績は大体いつも上位10番以内で、一目置かれていました。行き帰りに町の人や小学校の同級生などに会うと、一人違う制服を着ているので「山田さんとこの順三君や」と声をかけられ、正直いい気分でしたね。

町　通学は大変だったそうですね。

山田　片道約2時間です。課題も多く、部活から家に帰る頃には真っ暗でした。さらにそこから宿題して夜12時過ぎに寝て、朝5時には起きるという生活でした。確実にオーバーワークやと思いますが、優越感ハイというか自尊心をくすぐられていたので全然苦にならなかったのだと思います。

●それは中2の夏に…

町　そんな中で「ポイント・オブ・ノーリターン」と山田さんが表現する出来事が起きてしまいます。

山田　中学2年の夏休み前でした。学校までの長くしんどい急坂を歩いていた時のことです。ちょうど坂の真ん中辺りでお腹がギュルギュルってなって。グラウンドの片隅にあるトイレやったら間に合うと思って一歩踏み出した瞬間……もう出てた。トイレで下着と制服を洗って一番乗りで教室に着くことができ、校内着に着替えて事なきを得たかと思ったのですが、2時間目ぐらいになって下着や椅子の下に隠した制服から夏の暑さで臭いが蘇ってきたんです。繊維の奥のやつらが…。

町　クラスメイトに気付かれた。

山田　隣のやつが気付いて、周囲も「何か臭い」みたいな感じに。皆、原因は分かっていたはずですが、誰も何も言わなかった。もちろん、自分から「実は」と告白することもできませんでした。

町　その出来事がひきこもりのきっかけになったんですか。

山田　その日は早退し、その後も夏休みに入るまで登校はしたような気がします。あんまりよく覚えてないんです。いずれにせよ、その後、長いひきこもり生活を送るとは思ってもいませんでした。ただ後日談ですが大人になってから同級生と会った時に「何でヤマッチ、学校来うへんようなったん」と言われたんです。自分が粗相をしたことを、実は誰も知らなかったんです。あの時は「優秀な山田君が…」と思われたと落ち込んでいました。やはり「神童感」が邪魔をしたんだと思います。

町　急に学校に行かなくなった息子に、ご両親の反応は。

山田　夏休みの間もいつも通りの「ええ子の順三」でしたので、親も全く気付いていませんでした。そんな中、2学期初日に息子が突如ベッドから出てこなくなった。親は不意打ちすぎて上手く対処できるわけがない。親父が部屋に来て声をかけてきました。生返事を繰り返し起きない自分に向かって、

＊1）内閣府「こども・若者の意識と生活に関する調査（令和４年度）」
https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r04/pdf-index.html

＊2）『ヒキコモリ漂流記 完全版』
https://www.kadokawa.co.jp/product/321707000553/

親父は人生最初で最後のドロップキックを放ちました。

町　実は夏休み中に異変が起きていたそうですね。

山田　それまでは夏休みに入るとすぐに宿題を終わらせるタイプでしたが、この年は全く手を付けられなかった。ノートや本の角という角はそろえたり、部屋にあるものを全部綺麗に拭きあげたり、ホテル並にベッドメイキングしたり。様々なルーティンを全て済ませないと勉強を始められなかった。途中でシャープペンシルの芯が折れたら絨毯に這いつくばって見つかるまで探したり、文字は全て定規を当てて書いたりしていました。

町　それはしんどいですね。

山田　中学受験の時に何事もきちんとこなして合格した成功体験がエスカレートした格好です。ひきこもりの人って暇だと思われがちですが、頭の中はめちゃくちゃ忙しくて1日が終わる頃にはぐったり疲れ果てていました。

●6年のひきこもり生活

町　ひきこもっている時の生活はどんな状況だったのでしょうか。

山田　昼夜逆転です。昼間は仕事や勉強など頑張っている人たちと比べて自分は…と苛(さいな)まれてしまうんです。でも外の様子は気になって、自分の部屋の窓から小6の時に買ってもらった天体望遠鏡で、ずっと通りを観察していました。「あいつ、背伸びたな」とか。

町　ひきこもり時の感覚は「知覚過敏」の歯と同じぐらい敏感だそうですね。

山田　本当に些細なことでも気に病みます。それでもまだ俺は優秀だという自尊心の残り火があって「いつでも追い付ける。大丈夫や」という気持ちもある。一番大きかったのは「人生がめちゃくちゃ余ったな」という想いでした。

町　息子のひきこもりに加えて、山田家に問題が起きたとか。

山田　親父が浮気しまして。擁護するわけやないですけど親父もしんどかったと思うんです。素行が悪かった長男と比べて、わがままも言わず難関中学に合格した自慢の次男がひきこもりになったもんやから、親父の立場も弱くなってしまった。で、母にも職場にも全部がばれて、親父は瀬戸内海の島に転勤することになり、自分も家を追い出され、二人でそこに暮すことになりました。憎っくき夫と、ひきこもりの息子を同時に追い払えたということです。

町　お母さんに同情しますが、島での暮らしはどうでしたか。

山田　自分のことを知っている人がいないのは気が楽でした。生まれた町でひきこもるのはしんどい。実家にいた頃、親には働かざる者食うべからずと言われて、コンビニでバイトをしたことがありました。ある日、地元の同級生がバイト先に偵察に来たんです。「あの山田君がバイトしてる」と。でも侮(あなど)られたらあかんと「中高一貫の進学校やから、もう全ての勉強を終えてちょっとバイトしてんねん」と訳の分からない虚勢を張りましたが、結局バイトも続かなかった。

町　島にいた時に大きな転機が訪れたそうですね。

山田　人生終わったと絶望を噛みしめながら過ごしていたある日、成人式のニュースを見たんです。それまではいつでも追い付けると誤魔化すことで正気を保っていましたがさすがに焦りました。完全に置いて行かれたという恐怖を感じ、何とかせなって思いました。とりあえず、部屋からつま先を出してみる、2階から1階まで降りてみる、玄関まで行って靴に爪先を入れてみるとか、1ミリでもええからとりあえず先に進むことを積み重ねて、ひきこもりから脱す

ることができたと思ってます。

●抜けない神童感と大学生活

町　一念発起して大検、センター試験を経て大学生になりました。

山田　実は一番肝心な履修ガイダンスを適当に聴いていたようで、授業を取り違えて4年で卒業できないというミスを犯してしまったんですが、ひきこもっていたことは誰も知らないので、そのことはおくびにも出さずバイトしたり遊んだりしていました。

町　順風満帆に行くかと思った大学生活ですが、あの「神童感」は消えていませんでした。

山田　「山田君は東大に行ける」と言われていたのがネックになったんです。一発で大学に合格した自分はすごいんじゃないかというしょうもないプライドが蘇ってきて、東大に確実に行けるはずなのに愛媛大学って…と。もちろん愛媛大学は素晴らしい大学です。今から考えると本当に失礼な話です。

町　人間の自尊心はやっかいなものですね。

●背水の陣

町　お笑いとの接点は。

山田　バイト先で知り合った先輩がきっかけです。妙に気が合ってプライベートでも遊ぶようになりました。その先輩の彼女が通っている短大で学園祭があってそこで漫才せえへんかと誘われて、出場したらこれが受けた。大阪の劇場にフェリーで行ってオーディション受けたり。自分はこのまま芸人になるんだと学校には全然行かなくなっていた一方、先輩はちゃんと授業には出ていたんです。

町　先輩は将来をきちんと考えていたということですね。

山田　人生余ってしまったと考えていた自分とはやはり感覚が違うんやなと痛感しました。で、結局、先輩は「ごめん。やっぱ俺、就職するわ」となったんです。バイトしながら夜間に通い、ちゃんと人生を積んできた人は、そう簡単に芸人とかになられへんねんなと思いました。

町　山田さんには後がなかった。

山田　元々言い訳というか、「実は最初から芸人を目指していた」という顔をして、勉学での負けを誤魔化そうとしていたわけですから。ささいな衝動で人生を左右する決断ができてしまうほど、自分にとっては人生が軽かったんです。もう芸人になるしかないと思って吉本興業の養成所（ＮＳＣ）に入ることにしました。ゼミの先生、仲間、もちろん親にも何も言わんと、失踪同然で上京しました。

町　養成所では上手くやっていけたのでしょうか。

山田　海に浮かぶビニール袋のゴミが海岸に流れつくような状態で東京にやってきた。ＮＳＣには自分みたいな人生に行き詰った人間が集まっていると思っていました。ところがＮＳＣのドアを開けるとみんな目をきらきらさせている。友達（相方）としっかり戦略を立てて、ほぼ仕上がった状態で入所していて愕然としました。

町　通い続けられましたか。

山田　親に嘘をついて預かった大学の授業料やバイトで貯めたお金で養成所の月謝を払っていたので、しばらくは通いましたが続きませんでした。池袋の隣の北大塚にある3畳一間、家賃8千円のアパートから稽古場のある赤坂見附まで歩いて通っていましたが、遠くてとてつもなくしんどくてお金も完全になくなってしまい、卒業公演手前で辞めました。

町　ＮＳＣを辞めてしまったらもう何もなくなるわけですよね。

山田　死に物狂いで探せば就職もできたと思いますが、まず履歴書に書ける経歴がなかった。最近

知りましたが履歴書って中学校名を書く欄がないんですね。こんな人間が就職できるはずもないし、自分には将来の目標もなく「お笑い辞めたら、いよいよ死ぬしかないやん」と本気で思っていました。

町　お笑いだけは手放しては駄目だと。そして相方のひぐち君と出会います。

山田　最初はトリオで活動していましたが、ライブのオーディションなど一つも通りませんでした。メンバーの1人が役者になるからと辞めることになり、知り合って1年も経っていないひぐち君と二人になりました。何でこんなよう知らん2歳年上の人と一緒にやらなあかんねんと思いました。ですがNSCの時も含めてコンビ解散を何回も繰り返していた反省から「継続は力なり」という基本的な悟りに辿り着いていたんです。

町　気が付いて本当に良かった。

山田　とりあえずひぐち君とはコンビを続けなあかんと。一人でやる勇気はなかった。もう唯一の友達というか知り合いやったから。二人で寄り添い合うようにコンビを組んで、気が付けば親兄弟よりも長く一緒にいます。

●皆がキラキラしなくてもいい

町　お嬢さんには山田ルイ53世であることを隠していたと。

山田　約10年間黙っていました。親が一発屋でしかも貴族とか言うてるって娘にとって結構しんどいんじゃないかと不安になったんです。一発屋という肩書を恥じているわけではありませんが、子どもに不快な思いをさせるのは嫌やなと。

町　どんな風に誤魔化していた。

山田　フレキシブルに働くサラリーマンと伝えていました。ですが娘は部屋に隠したシルクハットを数えていて、ある日家に帰ると、「パパ、髭男爵でしょ」と言われました。否定したのですが「だってパパが仕事に行ったらシルクハットが一つ減るもん」と…。税務署顔負けです。「お父さんが髭男爵っていうのはどう」と聞いたら「嬉しい」と言ってくれました。

町　山田さんから最後にメッセージをお願いします。

山田　不必要にハードルを上げずに自分を諦めてあげるというのもすごく大事やと思うんです。僕は今でも社交的ではない。誰もが皆キラキラ素敵に暮らさなくてもいいと思うし、何者かになろうとしなくてもいいですよということを伝えたい。取材などで「（ひきこもっていた）6年間があったから今の山田さんがあるんですよね」と言われることには違和感があります。なぜなら自分にとってやはり無駄な6年だったから。もちろん、人それぞれ。自分に限っては、ということです。それは遠回りじゃないというのは嘘になるし、面倒なことは確実に増える。でも、ひきこもりや不登校は生き方として下手かもしれんけど悪ではない。自分のように無駄や失敗をした人間がただ生きていても責められることのない社会になったらいいなと思っています。

●髭男爵山田ルイ53世 X（旧Twitter）

https://twitter.com/higedanshakuY53

✽後記　10代で人生が余ってしまった山田さんですが、娘さんが生まれて時間が足りなくなったと話していてホッとしました。それでも今も小さな山田少年が見え隠れしています。誰もが持っている厄介な自尊心。私も自信はありませんが上手く折り合いをつけながら生きていきたいと思いました。